坤
旨想
一時斬
永
良五百員
へ 5
1881

門へ5
號 1881
卷

宮内省圖書寮

是楚東西あり
乾坤日月のごとく
作意古人雖波江の
波よりもとおく
和歌の道の
ごとくなる
一体なり
とてもかくても
ことの

[illegible]
多の数天下泰平
国土あんぜんにして
味よ何
[illegible]

如賓七ヒ来十二月朔日
難波津数人帰之

延寶七年霜月七日
於松門亭興行

芭蕉

芝海老や何の難波の葉源朝
[illegible]の味よ芦の花有恋
間寸量指遠上波越て蓋翁
物[illegible]ん嵐吟ん梅翁
撰[illegible]
初時静よ三声帰猿蓋支
人[illegible]種なる月此岩和松夕鶴
芭蕉の葉ひ[illegible]れ小鶴宗之

讀今年此度の秋をくらべられ惟中
庵山は東方勝くへられ丸陵くう西鶴
唐人は震云ふ月ハ丸陵くう西鶴
云くらと為て京綱の門保友
波は秋去れ魚やおとるん狂歌
味噌付くて汐とみちくる仰云
産うと蛙の鳴声　迪也吉悠
天は指さし　あの松をとて蓋翁
お月様同し　器の中の月様物翁
ちくらうつして　秋乃夕蓋布秋
評れい細字の乃やゆるん蓋友
采一粒は霧は去くむ夕為
花の世界解脱の狂を楽ぶ　惟中
浄土は蓋や油糟　坊くう西鶴

二

却震むあは向ハ山源は保友
ふくの秋は山を陸をうて路寛
元出て浪紫包見りくう宗之
きついを後いハ吉野彩田物翁
乙女子の唐の門は天源蓋翁
通と文衣は文もくく毎も吉悠
気吾くなる為の癒は宮西鶴
推をくくもん煩脳の尤惟中
六道の辻切強盗やまいと夕為
ちかくき世は白い物為くく宗元
百円は雲薩雲は入陸ふ仰云
凡程の毛類源は仕度布秋
鳴物ハ為布茶は為る点物翁
知くハ源寺断の月蓋友

秋来ぬと目病の比叡敬うれ有如
蝙蝠の鳥もとうら彩酒保友
河豚よ修羅もやりきれ函寛
さとけ今い煤よりも涼し仙去
家よりけ者第七許の隠家よ益友
世万を尉いたるを仕うる奴物義
仕方の風情も鄙もあてられ函鄙
之と孫の郎も出遊あれ益義
移らふ敵と試修て至れる宗元
気仏のんるいあるみの家暇中
仙境や蓬和うるゝ月 月仙去
名誉の赤実八百屋是東秋
菊嫁う猛るつうると和ると保友
ゆれの雲万を多れうるを鳥

石ゝさ元ゝるゝて勝うを暇中
笠の名鄙う張 奢の山函鄙
奇雅妙性の巡灵是遊原れう益友
を四文を乱水業屋の家函寛
川の瀬い秋の名を碧う深麻物義
盤をさきて吹郎う 風旨怨
婦人の病い心を入ういを宗元
文を原つ口よあるものの保友
為に一郎こ馬引て吸りり久鳥
七世の隠や新月うるん仙去
階うう地神い袴を踏和て東秋
潤うい降ううを仏ひうを函寛
酒桶を月をうるるとうれう益義
四方を碧中の秋風物義

朔雲の乱て落る雅百くり保友
さめよりして本あれ義宗え
廉れ夢まるふい一二　付合怨
えのしの車沢光より水ふく惟中
黒色い光宅の門子光てらふ梅翁
海四の波うてきへうせり蓋友
けらくをちらせ芭のあ沈函鶴
時ふ三節をせる切れ元蓋翁
遠道い見色きて蛙の去夕鳥
赤と名多くうける也雲本秋
見も憂生仁寺れ産の月函鶴
南雲沢弥仏心井冷し保友
其い地神花の沼万を好ふ俳表
ちりて春くて桃ち　重吉怨

名
寒ふ雲い東方朔ふ只今近惟中
を垣雑れ水ひふ雲水函鶴
醤油や新仁芭ふ知ある蓋翁
お初ふきて初も菊切保友
お弱ふ人をりふい芭蕉宗え
子石ちりて大事のふを梅翁
面底白ふり只ほるて夕鳥
青女房れ雨ちやもある初惟中
を見行墓いまかつて思の猫本秋
憲孫ふ詩歌を踏みて ふり俳表
若葉れ石ふを撰おれる吉怨
先世ふれ軍　大羽蓋友
弓張の月行方や母故越函鶴
見ふ多ち陽ふふ出れ青蓋翁

霧を一ツ胡地に入れて切つぶす　惟中
大きなる事なりとて人々色霧
五尺あるを扇をたゝとあをぎ　似柴
きりて見ればいとの目程なるの霧
いろ紅なるを見て極老の年よりと保友
明て梅しきに銀箔の蓋蓋箱
夕蓋に花望人とおもひけり　梅翁
山を霞より呼出しに出る旨意
江戸似春　九
大坂宗元　七
大坂旨恕　九　日　政意　七
日　蓋翁　九　日　惟中　九
日　梅翁　十　日　西鶴　九
日　東秋　七　日　保友　九
日　蓋友　七
日　夕鳥　七
梅筆一

行袋

朋之

神かけて袋を心ゆるす弁慶
籠袋へ入れと前も此花梅翁
相壇に初学者さもて蓋翁
ゑの山里ひとり白雪　惟中
かゝるみかもきてゐる嫁　如見
小奇ま法師の花の上風一飄
見ゝ小酒を取る花の月　章方
大筆用ゝ天使ゝ旨意

秋の金二千に新をとり立て牧羊
物知りたる鼻の下風朋之
又多種の人間服飾を飾ひ梅翁
佛法ありの穴いちの皮蓋翁
つくとあひ鶏の山をとるとり惟中
矢鳴れ後ろ向みとろろ蕎如見
蕎麦の花の稚の穂のあをゆえ一瓢
思ひのたちもとゆる別猶幸方
青葉はかつて雨もあて注洞旨忠
野辺の虫の息をたかる梅翁
芭蕉の月さへくらる鬢髪如見
又又一見聖一の夕霧惟中
花あれば今宵新酒詳別蓋翁
蛙のあそこ寡軍しして旨忠

穴を出る山ふる地ふるん雑翁
小役ちりけて去りてそこ一瓢
書脱の下とゆ神ゆえ朋之
永夫恵のかけれ去橋如見
くるくると蛍れ川の切めん惟中
亀井のあを曲者かけて蓋翁
うらひ陰へ汝えをわくく餓幸方
餅つきりて一唱の声朋之
頭をい三度地つけ山平蓋旨忠
手時永夫力蕎麦蕎惟中
ちこと出て小会せとの中せ蓋翁
せられ世を陰の付又至梅翁
山路年寄を穴塔とゆくく如見
二時の月れ仏時の月旨忠

唐衣相子本おれて出る心　惟中

[illegible]ある裏附の裏章方

[illegible]の梅の[illegible]て[illegible]出あり梅義

[illegible]の種の[illegible]やあいう如見

[illegible]弥生月[illegible]ある[illegible]て朋之

[illegible]の曉れる[illegible]義

[illegible]芝[illegible]もやま[illegible]方忠

江戸の雑摘　秋の夕[illegible]梅義

武蔵野の[illegible]章方

菖の無[illegible]えもいはぬ朋之

義[illegible]ちつくと[illegible]ふ[illegible]義

[illegible]の月新[illegible]

[illegible]れもきれ[illegible]の如見

[illegible]のけ[illegible]惟中

[illegible]ちかい[illegible]朋之

谷[illegible]峯[illegible]

水上の二日会[illegible]は川より梅義

黄糸白糸[illegible]せの源義

行あはちちかい[illegible]小鍋を一瓢

は新れ命よ[illegible]初[illegible]分如見

[illegible]たり[illegible]惟中

[illegible]ちかい中義方忠

大さ[illegible]二貫[illegible]義

女房子人[illegible]千人朋之

宗旨帳[illegible]章方

[illegible]梅義

は一勝[illegible]義[illegible]方忠

下新は碎の[illegible]秋風一瓢

あれきやいの声を松て鳴男鹿　如見
挨拶もなや遠く来山　幸方
商売の船ハ出て行出て行　梅翁
いさそいしらぬ出雲屋　古忽
拍子よりのそけハ琴の音くして　朋之
柳も松も一しほ　梅も大下尤　惟中
残月をちとこそさゝめあひの山　一瓢
御裳濯川ニ奥まて命ても　益翁
削札ヤ万代とるとみてなれ　幸方
こころとも更くて石垣か月　朋之
藁山のりこハ掃庭賽ハ秋　古忽
足あん流しの煙ふみに露　如見
ちやらおこと花のあてくろをよき　惟中
初発しく流の　葉　残白　益翁

名
松やあし隣の弥生ニ晴る　朋之
難をさけとれ先急の山風　幸方
古ヱろ松ハ木あり古杉子　益翁
一遍上人雲子起　臥　古忽
掛込し本尊ハ天狗そうれ切　梅翁
営れと右藪祇をたていて　如見
番ナ尾を月詠れ子出より　惟中
急てんあかハ鷹の羽かさ　益翁
卓香炉いつ高尾ハ鹿の秋　一瓢
紫檀黒檀嵯峨の紅葉も　梅翁
心ありハ今一声をつき引子　如見
又よといひし中ニ味噌酒　朋之
許をしてこそ悪風やさあらん　古忽
後傾く見くろふるしまわくも　惟中

[illegible]の[illegible]情を胸あてに蓋翁
人の師呈[illegible]之丸北十八梅翁
[illegible]の[illegible]世[illegible]も一瓢
[illegible]の古文あめ[illegible]加見
[illegible]亀[illegible]吟[illegible]凡北声 幸方
[illegible]と上性[illegible]松高[illegible]て惟中
[illegible]北一字[illegible]の花盗朋之
波[illegible]黨の家[illegible]北去[illegible]

肥前さが 朋之 十三　一瓢 九　日丸
梅翁 十四　幸方 十一
蓋翁 十三　与恕 十三
惟中 十三　梅翁 一
加見 十三

遠例和侯のもとにて

維舟

氣情[illegible]やきすこ加[illegible]を交性交
夢酬[illegible]の[illegible]お載の[illegible]保友
夕されい去山梅[illegible]百[illegible]梅翁
小[illegible]氣の[illegible]月[illegible]いさよふ白恕
[illegible]の奇持八月[illegible]函寛
坊[illegible]の扇の[illegible]維舟
新酒北下戸[illegible]ぬこそ仏道も保友
雨[illegible]山[illegible]梅翁

お出あゝ嗚つゝたる菓共者也
鈴鹿の一ゝ炉端の御水頂戴
今いゝも暑さ忘れて大あくび維舟
夕立〳〵退屈の元保友
係者仏法論味噌と油より梅翁
試名所れ京京菓い仏と者也
蔵年の文字と親て喰気ぜと頂戴
あゝんの琴さ一かゝ古き維舟
化物と鼻つまそで成ぬん保友
月ゝゝゝゝ寄なん梅翁
秋いゝ疫病らい心ゝ者也
ゝ紀恵風ゝ者虫の者頂戴
始めゝと天地の花の枝維舟
歩あゝのいて月ゝゝ山吹保友

二

常時月ゝもゝあゝ虫の芳梅翁
掛ゝ場ゝゝ霞柳引者也
遠山の尾端ゝつゝこけゝ茨頂戴
雑もゝせぬ谷ゝ好維舟
仏法の時ゝゝ者の祈ゝ保友
枕月の道い東(ヒガシ)まあり梅翁
柳生流今いゝ月由ゝ花ぬ者也
ゝゝ咲いて見ゝ一巻頂戴
あゝゝ八念をゝゝ衣箱維舟
ゝれ糸山ゝ嵐あゝて保友
天井の板此岩見ゝゝん梅翁
くさり此者ゝ雪の夕者者也
月ゝゝ仏此の涙の道び舟頂戴
かゝゝて秋ゝ維の壹賞維舟

肝つき嘘箱ゝゝ雪散て保安
はゝゝ物ゝせい関ゝゝぬれ梅為
あゝ石立子を子原の松芝五右衛門
涙にまを祈ゝ変しゝ後函寛
仕合いつ也ゝ合の柳維舟
親をゝゝゝて悔ゝ雪ゝ保安
江戸敷日向の國ゝ出ゝ梅為
撫ゝ原ゝ子ゝ敷ゝ墨屋ゝ
ま木の志影ゝ出ゝ涙ゝ函寛
雪もゝゝ遣ゝ宮浜橋維舟
内上洛月ゝゝ保ゝ
あゝ一の供ゝゝ厂ゝ梅為
飯ゝゝ定丸山の花盛ゝ
ゝゝ天狗ゝ深ゝ函寛

葛藤ハ霊ゝゝ紙の嶋維舟
涙月ゝゝゝゝゝ扶ゝ
出秋言ゝ澄ゝゝ
ゝ中ゝゝ保ゝ
紙本ハ女月五日北夕ゝ政寛
ゝゝゝゝゝゝ菖蒲湯維舟
女房の肌の白ゝゝゝ
針ゝ一ゝゝゝ
瓢箪ゝ能ゝゝゝ
あゝ雅ゝ竹生島政寛
供ゝハゝゝゝ
ゝり供原氏のよい初ゝ
月氣を東海ゝゝゝ梅為
江戸ゝ供の紫ゝ保安

相撲北之役者近来屋入函寛
鄙と都と神の出盛芳紙舟
雑色まとれをかして西竹保安
高くうとを吟し白洲一梅翁
与也陽路をけき船より古恋
二本さしうち芳笠の内函寛
小比丘尼のつとり調子の茶維舟
けいとうしいま
初詣と節分原走まあの鳥梅翁
燈まなかし大竜の月古恋
長月の昔屋の灯まれて函寛
そうなるあや蝶の屏風紙海
花やうと出そい男独武者保安
方後とかり矢八幡梅翁

名
前髪うと色とうしう古恋
脱引うう面とかい出と毋保安
いる屋の蚊屋の内外ん〜と紙舟
そうかいうなとと夜のお前函寛
題目の髪もあるかぬ責念仏梅翁
燈籠の作法を切ことと古恋
深かなうあるもし立うる紙保安
いうう〜せんい六浦の雪紙舟
坊竜の燈も胸とうて函寛
松風材夏の月屋時う梅翁
部屋付髪を出うう古恋
おう〜雲形とうる紙山門保安
横川若月かいうへの字うう紙舟
沼いうとせまあの怪し函寛

平包つむ名い立　秋立て　梅舟
梅も伽羅の香ゆい寄れ香　雄舟
夕ぞい陰ゆを吹て風呂場り　政定
涼しの庵ゆこうしめてこい　与恋
祇園林下新の老もみちゆい　保友
笠立也と付れ立ゆ　梅舟
いと寄て其方ふのさくあ　与恋
横笛鳴て蛍〳〵の舞　政定

京
雄舟　代
保友　代
梅舟　代
与恋　代
政定　代

何掃　　梅舟

皆人い萩を秋といふ共心こそ
雅俗の風俗〳〵小舟昌沢
和歌山或を聖無庵高〳〵沢風
掃ゆ三味線身れ遠方業就
若い庵の女ゆ浦ゆ天保ゆ　与恋
白雲〳〵むゆ〳〵ゆ　也平
姿んとい山の腰ゆ陸ふん　昌沢
貴所ゆおんて峯れ思岩　梅舟

雲舟の流れを見る滝の水栄枯
松谷川は波いとゝ沢低
嵐吹く峰の秋村見るとよ中平
日光仏時を帰る里人を忘
榜の音大原頻まる梅花
さゝも茂りて弱いそ昌沢
信濃の平れを立初めて沢低
北人を乗せる信濃去中平
青馬山出河の末い追巴を忘
間の線をゝ正面秋栄就
金剛寺の紅葉月昌沢
五月雨夕べ若み雪梅花
花は散て雪ゝと言ふ低み中平
吉山里も住む用ゆ沢低

嘗も関書の高ふり世を梅花
仏殿のゝ雲の村消を忘
朋よめをみこゝの夢陸黄栄就
西に別ゝる思い下京昌沢
比叡山あの塩竈の浦松去沢低
実樹を世ゝ松の村立中平
蓄提心空ゝ忘ゝの門を忘
煩悩の大迫ゝ梅花
今の世をゝの武者ゝ昌沢
好古記を富士の猪野栄就
道中の評判松ゝ栄就梅花
皇子を時を雪ゝ高沢低
手紙を相人月を考ゝ中平
先自の内ゝ恋程の色梅花

初汐の潮のあふるるのを吸ふ　常訓
抱つかれて戒　三郎吉忠
大黒のそばの経机あるの仏
おそろしとかれかりの鉢　中平
ゆるゆるとかくれかくれ二聖　時雨昌沢
物よハ木蔭の　梅翁
ちれちりハ仏ちちちの人の角　中平
蝉〳〵ちれちる陽炎遠仏仏
蝉立て枕かりうん　定忠吉忠
蝉蟲共の　昌沢
虫の声ぬけるる社角ちる　梅翁
ちちちと笑へ　ぬけ月新吉忠
天も花ちれ　二日酔仏仏
濃茶〳〵ち霞晴　中平

九月朱ち衣ちる風吟　吉忠
彩雲の色も　蔵屋の茅　常訓
椿梅もかち　中平
水仙の　昌沢
蝉蝉は前写　梅翁
蝉蝉の目ちかる白木綿　吉忠
仁吉ち角てち　梅翁
ちちちち波ち　中平
俳ひて零時　常訓
庵丁ちちち扇をひく　昌沢
利刀ハ間　中平
嵯峨の絵ち　梅翁
ホトトを明て人と　吉忠
七十ゐりま月の芋方　中平

秋の夜乃七ツ時ハ宵ハ宮ハ世界と成 梅翁
燈をつけ申候 栄訓
なれて山と成 里ゝ 呂沢
武士なれの深世いとなして 旨恋
梅ハ其道服を乗り者の黒ハ 栄訓
南無阿弥陀仏 皆極楽寺 梅翁
長隆寺ハ 祖と申し 也平
又若狭ハ出なされつ 呂沢
恩報ハ 梅翁
京道の恩 紀雪の傘も 旨恋
月赤く 表 呂沢
醤油 梅翁
花ハ陰 栄訓
長尾 也平

氷乃浮時 梅翁
朝日 栄訓
食 呂沢
亭主ハ下乃 出 梅翁
市 人の 也平
 呂沢
 呂沢
 也平
 呂沢
 也平
 呂沢
 梅翁
三限目大埔燈の 梅翁 栄訓
扇子 松原 墓 積上 旨恋
お新 月 相服 也平
八十 のさびしの声 栄訓

月待とゝ小笠原の杉うつり　吉恕
散葉〳〵散乱　梅翁
あしら〳〵の通ふ山路も　昌次
峯北白雪立てあるゝ　栄親
嶮しき禁の里刀石地　蓮中
さらし仕丸くの沖鳥　町吉恕
花を根ゑ家ゐ也　梅翁
梅の立枝を拾ひ　昌次

梅翁　北一
昌次　十八
以仙　九
栄親　十七
吉恕　十九
蓮中　十九

何拂　梅翁

それさたなあ音ゝ節ゝ
餅実の殺ハ通ふ各別　西鹿
実の割北月独〳〵仲ゝて　江雲
生れ出るの〳〵ゝ　吉恕
乳あ体て草北独ゝ秋の実　西鹿
氣を付てゝ菓乃うゝ枯ゝ　東栄
〳〵と一行地鳥居て　惟中
移ちもく　恭北久ゝの更　梅翁

行てさらに形て西の空の風 西庵
十年ばかり 洗足の庵 江雲
破棕櫚 松の木柱竹の垣 白雲
時雨も今を待ふるの雫 西鶴
古方よりの之介軍 赤丞
つゆのそしの縁り 雅中
赤恵い世界の寄 梅翁
出家を夢 お前も北枝 西庵
木奥とも 腥ちよ西し 別 西鶴
一持ちもん 秋の時 梅翁
夕雪れ下 這あく 善太郎 江雲
熱熱 ふる 所内 自 白雲
振舞 花 清 軍 山 雅中
形 の 沢 の 鳴 赤丞

小 雪 清 て 西庵
腥 の 雫 雪 の 棕櫚 江雲
鯉 の 奥 雪 の 際 梅翁
多 際 離 て 蓬 生 宿 西鶴
繁 掃 ふ 白雲
くこ ふ て て 面 雅中
憲 の 道 多 熟 遠 赤丞
ち の 恋 い 秋 田 も 死 梅翁
切 徳 地 の 小 さ 今 い 西庵 西鶴
蕾 く ち の 新 ち 白雲
破 し な 恵 い め 北枝 江雲
刻 ち 恵 い 喧 鳴 ゆ 赤丞
九 す 多 月 を 清 て 懐 雅中
ち ち を 西 作 ち 西庵

屋敷に流れ入る秋の山吉野
日よりぬぬるを送り出る新西鶴
鬼神のお松はあるなを物語
院伊勢路の古文庫より江雲
女郎狂ひ陸奥松の子世迄亦来
もりの茶をそやさせ惟中
産屋に流れ漂ひて西鶴
猫新婚に臭ぎて古恋
鶯花に詩歌ゆくさ夕暮江雲
生れて出るよりの年の基物翁
破鷹に引る根生出る惟中
味方の勝ちの綱引西鶴
月出て西の橋山の月みて西鶴
平地と知る蓬原の来亦来

いつれ百年初風の吹錦欲物翁
もくらえよりの日くしの時江雲
おもん〳〵を敷れ妙音羽山西鶴
うつけを迎せるを有頃西鶴
身祝に宮に風に仕らして吉恋
さ〳〵い中も波の立れ新惟中
もくろ腹薬に伝出る立春江雲
鶯の紅竹を立てしてやろ物翁
不動に元元人の不定也惟中
雲に乗る人の姿とりふる西鶴
新い猿の好きに成沼に西鶴
壬生忠仏を感しいに吉恋
白雪と月と嵐と隠逸の山亦来
雪ちくれに思ひ出し江雲

地蔵や巌の月に鶴ぬるん　梅義

白玉天ととろろ物也　西鶴

打もりつく持さしさし拵出刀　西鹿

向ふ元〳〵奥鮮　鶴翠　亦示

盤上は運の強さ　有怨

手足せんとつとこと人の剣　梅義

及ぶ社　御上さまあおのこと仙雲

いらっしゃあ一服　惟中

むく起の夕横　鶴翠　亦示

さらとさらる秋風の声　有怨

をうらわ月と村雲　梅義

ちる柳て富城の神　西鹿

天よ今花は見に貝の階　西鶴

ことよ仕落もうら雨降　亦示

名

居うけるよ立上りぬる夕雲雀　惟中

聖徳の宿さる中の小仏　梅義

宮殿と目のあ川とやなれ江雲

夕橋〳〵松わこの花　西鶴

道上社扇の竹や鹿〳〵ん　有怨

花色さよ〳〵花　義〳〵　惟中

宮法川をあめてよ法〳〵　亦示

根こあるこる瀬〳〵の鍋代木江雲

壁柱も桃桜て流るめり　惟中

お江戸よあるさの声　有怨

閑時て秋い鹿てきりり口梅　義

月ゝ夕ゝて生　西鹿

夕鶴魅の雲る流〳〵　西鶴

されて吹りん雲大山大江雲

忘れられし人はまよふ里に　西虎
ゆるさるい外は何かゆゑもなく　亦呆
定まり入あるしの煙立消て　西鶴
居くひもらり移れ　嵐　江雲
狐めハ吹矢の先にちらりとも　旨惣
黒ミ人の前に仮目ふさいて　雁中
花まよれい茶臼をすゑ垣ち　梅翁
若らへしもあらぬ　嵩　雅筆

梅翁 十六　亦呆 十二
西虎 十三　雁中 十四
京 江雲 十五　雅筆 一
旨惣 十四
西鶴 十四

国かゝ出る新もの
八幡宮の流鏑馬の
すき者のしや太郎冠者
なんてあるゝやい御前ニ五百
銭会るゝ早ゝ出る

延寶七のとしさくら
いさいけるふりさむ月
の井のあるそれのなれ
そなの時ゝ多ゝしす

良忠城下春茶

太郎五百韻

延寶五巳年五月十二日

一時雨大坂住宅初会興行

何もしら社蔵れ難波の住　松意

おれ高砂の松の鳴の梟　一時雨

大普請庭の泥水岩ふれて　益意

夏ちみとりの松乃ゆかし　由平

きけそまつ時鳥初の就講　西鶴

はかなけれ屋こそ也　如見

まさしの恋ふ八の月　光音

露はらはれて月引ふ　有恕

神路ゆかしと人れ問ふ　貞因

見もえしれぬけさのはつ　牧笛

ダ

ダ

ケ

ウ

ハラタル

ふんこそ一

多ら多勝ケ物ふ陸ら乃　松

以れ世よ多の活ふ平

やあ〳〵ちら〳〵秋ふ　益

すつきりと行て見ふ

京よ入〳〵カ地ふ西

時ちとひとそいふつ忘

風いせられて古の秋　音

白露のいまふ鶴ハラタル　松

えらら〳〵月乃ふれて　因

花の山毎物中をかふて　益

矣さきあり乃ら多の音　一

二　碧ふの尾いふいも郭出　西

今はよりもふ芝居　見

雨天まハ上下てもありさて　平
多一ひねり　京ハ　鄭痛寺　栃
法皇ゆゑの白川のほりさう　音
時ゝ嵐原血のなみこ　義　忠
書移　京ハ京ゑてとひかり　因
杉流下枝ハあろれまいりの　平
竹間てあるとひてもひ　栃
すいや火けしの役のめんゝ　益
秋風や蟬とふ虫をさそん　一
出物ハ多ハほくらの国の米　西
酢　剤ハ月を加へてしほけを　見
多なるゝ水ハしや雪やをん　音
三ウ
ゆまくれ忍ひてらよひ殺ひし　忠
つる法物ひい二之百姓　栃
神ゝくゝくさゝれもやもちくらん　平
水ハ多きたゝ立体熊のみ　見
源の糸ゝくゝ切中の山ゝて　西
皮強盗ウ音ゝの里　一
ふれのあるわ屋つきの秋の夜　音
下ゝくゝてもとふるつふる　因
野生ゝ多ゝ月ゝ関て切ゝ　益
ものをちして義塚のさた　平
雲ゝつ松皮木村長門ゝ　栃
ゝ胡蝶ゝ草黄ゝ　西
多ゝ乃多一意ゝ月みて　一
蛍のあしやゝ風呂吹出ゝ　益
三
近くゝまゝ入前の女帝花　因
紅葉つけ多つけ　桔梗ゝ吹　栃

細工絵の様の野いと成ぬ　西
既軍も　やうやうあつまりて　怨
母衣軍（ホログン）とてんぐ山も乱れて　平
子共　自分ゴ切りふ　敵の白　音
三郎いろはしのと家の内　見
は調（ヅキ）れ　ゑいりゑ入りて　西
法れる　徳田の　さけあるなる　益
らんくゐさもも　ゑうち出ぬ　一
るのすさびつくりて　立浪ゴ　怨
俗正の時　尾ぬづつゑり　見
小野の月ゴ　切やらんさ　栃
ゑゑ米の森ゆ　ぬゑゑ切ふ　平
三ウ　ゑゑ法ゆ　あゑゑ　ゑ　一
ゑゑゑゑ　ひゑゑ子　源文　因

はけとけあゑりつゑゑ　氷室山　益
口はゑりゑてゑゑ　見ゑ代　怨
関ゑ戸の時ゑゑ　ゑ　音
きのゑも三人　唐人の　栃
塙（タシ）ものゆ　ゑ　ゑ切出ゑ　平
ゑゑりゑりの所ゑ　乃米　益
埋れゑりゑ起ゑ　ゑ　見
雨ゆゑゑ引　山いのゆ　一
雷鳴（スリハナ）をゑゑ人の　栃
月ゑいゑれゆ　大ゑひして　平
ゑゑいゑの　ゑゑ　西
はゑひゑゑせいゆ　栃ゑゑ　音
名　ゆゑゆ伍名（ケメウ）宣名　ゑの　ん　因
ゑゑゑゑれゑい　山郭　見

むしの声の庵の茗荷（メウガ）け　一
緑の帳と麦めしよりの恋
ひふのよい秋の移音ひさし　益
男とうんとも はっきり　牡丹　西
片そを取ておきていさぬませ　柳
ひっふくとさとひろ坊さけ　国
ふれくの中ニ片合ふ体かの恋
下ものけすしの虫のあっく　益
もし野ハみひろ丸の月　西
塩ふれ井もあっく　秋　一
つせくと拾て逃ル草（カハツクロ）袋　平
ぬけそうな〔も〕ちひろ人　音
小ばくみい音ひ夕もまも羽ひ　益
さ時天ろ　根一ばくと　西

すこ林を判しよりの名笠ふて　音
さちまも　鶴乃ふそをあっれ　見
牧下ふい地蔵（ニヘ）のちっけっかの　一
佐（サテ）ちっこ蛇ハ人ちまっ　柳
笠ふくやそもひて小柳　平
百敷そあっこの宿乃春　恋

柳葉十三　如見十
一時形十二　茂吉十
益茅十二　青恋十
中平十二　貞国八
西鶴十二　牡丹一

延寶元年三月　但口の序

世間のつれ〳〵なるまゝに思西氏
をゝしき家をひらかしまうけ
て毎年百姿の長〳〵なる筆
のをさまるまゝ

一時庵

笠子酒や蓋〳〵あけて二三
春のうゝとくまはるまゝ　但口
八重霞む我倚も和ハ郎とて　日
せき筆のあと山の精あり　一時庵
寢ぬ夢せりう多筆　日
ふゝまを月を五合〳〵　但口
暑さ狂せるゝ球る川遊登　日
美るまゝ作の柴の雫　一

蔔〳〵一町四五反のひまを　日
たハさゝりなくハゝいれハせ　口
大和尚ゝ〳〵ゝ精をあまれ　日
ゝゝの物ゝ見ゝれ也　一
蛾ゝ体やゝ多へのタ多ゝ　日
あいれおゝの名筆のるハ　口
孔雀ゝゝしたハむゝまを成果て　日
富産の悟筆さゝゝ　昭ハ一
拂して言歌一曲して来ゝ　日
ゝゝしれて体又ハゝねゝ　口
美いれのゝまを美ゝまをハ鞠し　日
やんやゝ来ゝ秋の雫　一
ゝゝゝは月も新る五十鈴河　日
伊勢ゝてゝれゝの柳灯籠　口

ちゝめらい神しいさめんちゝ者は
京師の子兒はいあるりかまし一
ひんつゝいゝと蜂のゆら蜂は
京ちゝにゝふ三保乃松の木は
白砂の浪をひゝとゝち殺ては
夜部よつけよあまの釣舟一
相もそゝ皆名ゝてゝ作人は
北面をやめ南山あゝり口
窓の袖い雲ちゝしゝら移ゝめんは
なるちゝめ法なまのまの月一
詩人の言葉ゝ捻て詩歌は
回つゝの俗風俗やわゝん口
世ゝ俗ゝ布袋のすきゝ言葉は
ゝゝゝ毎のまゝ俗ゝ一

かゝゝを首ゝかきれも猪は
よの法ゝちゝゝま追放の蜂口
わゝい相とゝちゝるゝ月ゝ雲は
似せゝ無ゝゆゝちきま一
成敗ゝ法ゝりゝゝを猿の声は
ゝゝいゝあ我侍ゝ大名口
直ゝ行もゝけゝんゝ曲ゝ鶯は
ゝ二三里ゝ成ぬつゝや一
老ゝ牙のむゝゝ当て死出の山は
先陣ゝ陣ゝ法ゝゝゝ河口
陰ゝゝ德ゝ隠りて只あつ氷は
きゝゝ生ゝ小人の業一
實相の風ゝひゝゝあもゝは
ゝん条ゝゝ春の雪山一

[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口

[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口
[illegible]　は
[illegible]　一
[illegible]　は
[illegible]　口

名

強ふよく深き料や好む人　日
夕寒は人見ぬ方の浮き上　一
猟師の斎生れ花に任す(?)　日
夢んのふの気ふいでも先ねん　口
菩提をすり脚半(キヤハン)も天狗戒(ビラウトウ)　日
[illegible]蕃畜かつる河の流　一
それは姉背の山此中にあつる　日
旅こゝろ在不やまと紀の国　口
なかる密柑の[illegible]や模のつき　日
辻堂さむし寒さにふれ本　一
石佛膝の苔深くふけつゝ　日
ふりあけし出ろしもひや　口
月と忘れ怨敵(アタカタキ)をも助(タスク)るて　日
菜のなせて急のわざとせて　一

ウ

下ふくて筵にしたもようぬくし　日
寝覚の後へ膝子ならく　口
[illegible](ハカセ)銀足(アシヨ十カ)後長みてもいろけ　日
けつらしのしかつゝらつり物　一
うち振て人のぬかりにぬかる事ん　日
大玄頭(タイゲン)を挿しまためかし　日
もさるは下おもつかあらく　口
祇園清水春の小車　日
一時軒惟中　五十
西岸寺任口　五十
淀の三ケ所を伏見西岸寺乃やどり
子孫しるく
あら久し人も綿針糸[illegible]　一時軒
まきてはらはる表の山風　三ケ

滝の音ちゝくと霧ませ　仁口
いそのかみをぬるゝ袖　一
青葉おろす山風　三
月みる秋の夜ながら　一
小百野急を知る鹿の声　一
うゝけつゝする萩の露　三
十徳（ウ）て修業をえてかしこまる　口
是ぞ歌すゝむ翠微（スイビ）の山　一
金笠ぬれぬるの出る峯よりも　三
なるゝちゝ柳枯形（スリコギ）木　口
修屋久伯うさたんむる弱　一
公俊のいとけあしく　三
人として垣（カキ）ゆゑを敬まい　口
ゆれそゝうちむりかゝらち　一

今は早ひけのはてる虫の声　三
笑ひもてもものゝあはれ　口
白雪やひこきの入しむらん　一
この海屋は月もとゞこむ　三
世を思ふまいもゝふれ　口
あけぬるゝ初陸奥そ　一
程くの子信寓言（グウゲン）ゝ　三
本性とゝとられ詩の末　口
さめてかゝ等ゝ格あ　一
芸ゝ　三
十枚ゝ　口
あゝ　一
玄宝ゝ　三
口快の　口

[illegible]の[illegible]の　忘衣　一
[illegible]　三
河原の立注　[illegible]　口
[illegible]　一
[illegible]　口
[illegible]の[illegible]　三
[illegible]　口
[illegible]　一
[illegible]　三
[illegible]　口
[illegible]　三
[illegible]　一
[illegible]　口
他仮[illegible]　杉の[illegible]　三
[illegible]　一
[illegible]　口
[illegible]　三
[illegible]　口

[illegible]　三
[illegible]　一
[illegible]　口
小家味（コヤミ）の[illegible]　三
[illegible]　一
八坂　名さ[illegible]　立[illegible]　口
[illegible]　三
[illegible]　一
字完鑿（ジセンサク）[illegible]　口
[illegible]　三
出納（スイトウ）　多紙をれ一[illegible]　利　一
[illegible]　口
[illegible]　三
[illegible]　推定（スイテイ）　口

入月のあと吹送る風呂の内　一
みんとて　なびく雲のたゝ雲　三
よそゝのこゝろ　玉まんぢのも　口
ちゝはゝとも　つち蛙　一
胎の中　ゝゝ　やさのゆ　煙　三
そ青ハこゝろ　はゝはゝ　口
八卦（三ウ）　舟行　ゝゝ　掛の雲　一
ちひさいこゝろ　浪　むや　三
業盤　むゝ　風の心地　口
ひゝとすゝ　乗れ尾乃山　一
是や子供の白　みゝくとゝ　三
業十（イク）　蛍（ダンゴ）子　足せ　つゝ　出す　口
名ゝとゝ　人ゝ　ひさゝ　ゝ　一
陸子の　ゝ　ゝ　月新　三

浪風よ　物　さゝ　ゝ　ゝ　舟　口
出女ゝ　解（スキ）　ゝ　一
付　ゝ　ゝ　ゝ　三
ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　口
床ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三
雲ハ　ゝ　ゝ　ゝ　一
水（名）　滝（タキ）ハ　ゝ　紙の三子　口
線香（センカウ）のすん　神　ゝ　三
作ゝ　ゝ　ゝ　熟（ジユク）　一
旦那　ゝ　ゝ　乃　口
寝　ゝ　木屋（ボクリナゲ）　三
杖　ゝ　ゝ　月　一
名ゝ　ゝ　蛇（クチナハ）の厨（ヅシ）　口
七ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　三

十ろい計子母の翌年まよりの一
寒とろ下すう腸をさえれ口
木綿布巾のもひをよろう深をみ三
質ふれはらて仲の紙毋一
はは上八人ろ若よ乞食(コジキ)ゑ口
ろろのひろい変ろ物て三
請もとろ先おけて槽河一
はの入ろこおとゑゑゑ口
日備苦名のりもあよ三百人三
きんのろ立てて強ろおて一
もの木をはて方るい居首(ナクビ)せ口
為りはせえん山ふさの父三
花のるはる三す計子成ぬろん一
名吟しろ吟るろ居ろう音物

一時行惟中　世三
木村氏三ケ　世三
西谷右仕に　世三
執筆　一

家ま入道あり西鶴と名のるはるる日
金よ会し秋の金白十ろ子白ち
あ吟せんるはのもむえもさろる
ありてやろおさりとて僕(ボク)尾孫の白い
あけろふんていろ体ろねもかの入左
ろ金ゑの詞をいろろ立ろさもろ
はかりて梓よちりてあぬのちえん人
の目利よのゑて住むりろてられえち
ゑのろろ左ん立ろ硯めんりの
一時行惟中

男野ゐとゐ秋はぬ子白物
名誉ゐ思議ゐ口ゐ唐ゐ 西鶴
初投大覚庭ゐ庭みさは
出ませい〳〵晨明ゐ月一
小夜ゐうて腹ゐへゐは
ありて砂山の音西
ゐ一さんうけそと水底ては
ゐ多弦ハ市〳〵浦とゐ一
首引て志賀の浦ゐを詠ん四は
さく〳〵弥ゐ月且雪ゐ里西
本の財風やとらんトの夢は
一丈水ゐ二尺八寸一
大鯨張ゐ吉ゐ砂をあしは
ゐゐ雛ゐうゐみゐほゐ人西

めしさ客人の文ゐねゐは
ゐゐもゐとゐうこしの白山一
ゐ秤ゐゐ〳〵の笑ハ立しゐは
秋の雲ゐもあゐもゐ砂ゐ西
さて城鶏と成てゐきゐん一
是非髪ゐれゐいんの月西
ゐハあれゐ酒代ゐ一りゐないゐと一
六人ゐ仕〳〵ゐ海ゐさゐゐ西
大ゐの笑ゐゐて明ゐ笑は
二時目ゐ仕ゐ城ありゐゐ之一
ゐゐゐゐゐゐゐゐ京ゐハ離ゐは
用心ゐ柳腹ゐ乱火野西
狐人ゐ笑ゐゐあゐゐあゐは
ゐゐゐゐゐゐゐゐむりゐゐたち一

公ゝたゝみ流の水上はとあふは
嬢ゝも関ゝを音なり一の河西
根ゝよりゝ老女房をよゝ子ゝを日
志賀（スケ）かゝくゝるいとれぬの一
昭ゝも新ゝゝ笛根山は
この嶋嶋ゝ月の移ゝ西
天乙女ゝ音ゝゝの音の月日
ゆひゝゝゝるゝゝゝ西後れ雲一
二ゝ月ゝ雲出ゝゝ音ゝなくゝゝの乾（カミ）日
入野のゝゝゝゝれあ浄ゝ西
法宮鑒世界ひゝしゝゝせゝ日
ゝ眉ゝあけゝゝめゝゝの山一
あんゝ昭ゝゝゝゝゝ折のゝゝ日
ゝゝゝ音ゝ笛の内保者（ヤウシヤ）西

ゝゝゝ野のゝゝゝ夢ゝあて日
目のひはゝゝ船いゝゝ一
はゝゝゝ備めゝ人ゝゝゝ日
寝（子）ゝゝゝ恋ゝゝ西
前ゝゝゝ仏（カミヤウ）をひろゝゝ日
鈴乗かゝゝゝ石ゝゝ一
花ゝゝゝゝゝ自分ゝ日
山ゝ雲ゝゝゝゝ西
三 佐保姫の一宮あゝゝゝ日
寝ゝゝゝゝゝ一
酒の醉（エヒ）ゝひ出ゝゝ
玉藻ゝゝ女郎ゝゝ日
恋疲（ヤセ）ゝゝゝ西
ゝゝゝ国ゝゝ日
ゝゝゝ三ゝの字七七一

伊弱山南の風まあゆさもて　日
九合羽出せ雨もふる　昔　西
人の傘あふ引男を待りふ　日
ふつ雨とふふ　一
竹のもみ馬ふ一ち立ふ　日
神ちりの少田ふのあと　西
月庵（サビ）芭蕉ハ杖て観音講（三月八日）　日
うりねすこ　一
蛍の風ふるふ　日
所まおんもいふ　西
百目の時拾ふ（十二月）　日
弘ちとて　一
書みせて人まぬ　日
あふふ宿のまふ　西

腰ちりのあし　日
ふき細工もあふ　一
貧乏を四の家ふ十禅寺　日
海ちふ所ふ　西
見通しと中一涼き月ふ　日
ちぐれのあふ　一
磯の苞ちふ水母（クラゲ）も埋れ　西
海老の目家ふ　一
七夕の芸菓子　日
ちとあく二日三日　日　西
中人ふ今ハゆふと　日
古きふ　一
蟬（スミ）ふ　日
ふふ　西

のむ内より暗くハルふの初むて日
おゝ白鷺おゝ白鷺と一
時雨まハ淩霄の鄙おゝ日
都会久しくれ行のゝ砂風西
さりとていえて面ゝ日
おつけをもれて精さゝ声一
月ひとりさゝまゝ本眼さ日
茅のゆりや原こしの家西
ひゝのゝ花とハゝあゝ日
ひゝとゝゝゝ原也の野の原一
捧ちゝゝ木苔口然ゝ日
無蓋こゝゝて為ゝ浪西
為ハゝ滝の音と消ゝ五月雨日
家鶏中ゝ恵山のゝゝ一

ゝゝゝゝ恵を法師ゝ日
三人一所ゝ三 重 巳 重西

一叶行 五十
西鶴 五十

松葉行西鶴

狼や出て我ゝの野一の花
白鯡も釣ゝ千里月風 一叶行
是ゝて舟ゝ月をのゝ花ゝ
丁ゝ骨やゝれゝ 大力西
朔夕ハ山ゝゝみゝてあゝ
蓋ゝちゝゝゝまゝ三ゝ地一
言蔚法古ゝのあゝちゝ
ゝちあけのゝ松のゝゝ立西

芋や藷やそまめ笠山をうせ、
門さしハあらゝせとまふ一
付物をはれくまるまさあ鈴、
九月をあけ公よあつら京西
出合ハ三条わらわせづゝ、
まつらうりすゝ辻風一
されさハ法華四の代ゝ、
ぢよ魚つてうゝしをを京西
面目を南大門ハ戻ゝまふ、
猫しやあつゝめの猫ハの秋一
月ゝうゝ始めハ帝のさう京魚西
いゝも京こ東仏新の家一
職人の代をあゝを花の忌西
ゝも京ゝ京ゝ京ゝ一

妙法院念仏のあゝ嶋ゝ色、
釋迦の死日ゝあゝ魚ゝ西
二月九中の三五ハ十八ゝ、
なつゝれハゝを九いゝもれ一
なゝゝすゝ狗肥の淀の、
りふゝてあゝ山のゝゝ雪西
太の脉ゝあゝ日ゝゝ時魚ゝ、
秋ゝり時ゝまゝ多く京の戸一
かんこゝい白ゝん荒ゝもあハゝ、
ゝのみ狩て場ゝ屋首西
出産つゝゝ人ゝあゝまの芸魚、
先刻おゝまゝ字法の河舟一
古狐月ゝを出れ胡日山、
どゝゝをけゝる萩の花花西

秋の風あるを野もりのくみのま、
今いくらあるを聞るのこし羽一
ゴレウ
あり此屏拾平浄去年生月、
わらけも本ハ平家のま鉢西
拾拾らて世金ゆハ服をき、
ヤニ
撫いつしゆらハ義やれり一
ゴ
せう墓ハ月もあるなりき、
ゴ
為平完保分あるも出る西
あいうう愛をを夕煙、
八日まるるの義るの義一
ギイ
祖父の髭屋土の名のおとし、
葬を屋ゆとあるるのゆふれ西
スミカ
此百度も掃屋まゆ〳〵あるし、
アク
悪ゲをを〳〵ふ松の木古文一

茶をつゐむ鶯ワシるの保山ををを、
阿弥陀のをを〳〵のををを西
是も又平れ姫ヒ職ヒ屋、
アヤ
綾の小袖ようひるん一
アモ
蚊帳まるるや縄ひろ屋、
ヒ
投海屋まるるをやとる西
うとんのを入江ヒ塩をを、
加減ヒをを〳〵阿〳〵の末一
針一本あるのをを西、
をををみをを長あるる西
寝て起てみれて起て常盤ヒ、
をををを〳〵て起ようを一
ををれ犬宇ウ人ををて出る、
西をを西年の文月の新西

袖の家ぬれて紙屋よりいれて、
何へとゝまつて蜂ハ高一き一
ほ家鶏のはれても来よあいん、
ゝゝゝゝあとゝ鶏のあゝゝ西
すあ堺高雄（サカヒダイヤウユウ）を見るれて、
五分七分 高かふ定一
配剤（ハイザイ）いふふをん和（ゴ）とすや、
月言和歌言反ゝ笠（ハツ）西
一れいゝゝゝゝゝゝゝゝ、
詩人をとゝ茅屋の中一
二ゝゝ魚てゝま詩帳のゝゝ、
金の内帳（ハイ）いゝ振（ニキツ）てゝあゝゝ一
大文歌ゝゝ国ゝ花の風西
ちゝゝいゝゝゝゝ苔ゝ奴、

養（オヒナ）ひいゝれゝゝ雲のゝゝたて、
ゝい水ゝゝゝる霊（レイ）験ゝ山一
洗濯物碧潭のゝを海出ん、
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ西
殺（コロス）ゝのゝゝあて山毋の音、
けゝゝゝゝゝゝゝゝゝ一
まんゝてあゝゝあゝゝゝ、
黄檗（ワウバク）山ゝゝ出ゝ家僧服西
五ヶの在俗僧名ゝあゝて、
四舎ゝゝゝゝ源の河舟一
移ゝゝび子をゝゝ平遊、
松ゝゝれのゝゝゝゝゝゝ西
花は花あゝ生石のない三角（スミ）山、
中為ゝ月ゝ明ゝゝれゝゝ一

瓜茄子麻の音もろんやもく
ねうしのやまゆかみそそき西
瘴病の息ぬすうゆ雨ちりて
出至のこんあとのくさと一
ちしつめてあとはきちて入さ山西
あくのもくもくうくらいよせん
花ちちて蛍こい〳〵学文而一
一盃のんさ泊江乃水

松秀行西鶴　五十
一時行惟中　五十

5年3月

瓜茄子麻の音おろんやもく
ねうしのやうま多ふかみとそ西
膈病の息ヤミ下ろう寿ちて
出至のこんあとめのこと重一
ちひつめてあとはこきちて入さ山西
あくーのめくりう入らいよせん
花ちて蛍こい〜学ま又而一
一重のんこは汲乃水

松秀行西鶴　五十
一ハ行惟中　五十